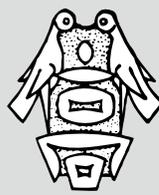




第31号

東京鳩会

題字は初代会長笠井正人氏



会報

長野県屋代高等学校
発行：東京鳩会事務局

会長挨拶

会長 重見憲明
(高校十七回生)



東京鳩会の皆さんにおかれましては、収束の兆しがいまだ見えぬ長期に亘っている、コロナ禍下、お元気でご活躍の事と存じます。また平素は同窓会の活動に對しまして暖かいご理解と支援を賜り心から感謝申し上げます。

新型コロナウイルス禍も間もなく三年近くになりますが感染力は強いが重症化リスクは小さい、オミクロン型が主流となりインフルエンザと同等の病気になるにつつあるとの認識で9月には「ウイズコロナに向けた新たな移行計画の全体像」が示された事により徐々に日常の社会生活への変化に結びつくものと思われま。

これから冬季に向かいインフルエンザとの同時流行、第8波も懸念されていますが、来年度こそコロナが収束し日常生活の回復を期待したいと思います。私事で恐縮ですが長期のコロナ生活で読書の機会が増えました。久し振りに再読に値する良書に出会いました。全員の女性教授(米国コロンビア大学)シーナ・アイエンガー氏の「選択の科学」です。「選択する」という事は即ち将来に向き合う事だ。1時間後、1年後、或いはもっと先の世界を垣間見て目にしたものを基に判断を下す。その意味で我々は皆素人の預言者だ。」との視点から選択を礼賛するのではなく選択の力、怖さ、を丁寧に説くと共に賢い選択のための方法論を現実的に即して展開した、説得力に富んだ内容でまさに目から鱗でした。変化著しい時代にあつて自分自身の日々「選択」行為の参考にしていき

たいと思います。

さて東京鳩会の活動については、ご承知の通りコロナ感染直前の令和2年2月第37回総会・懇親会開催以来2年間中止を余儀なくされております。この間は母校と会員の皆様との繋ぎ手としての会報だけは中断することなく発行し皆様に無事にお届けすることが出来ました。会員の皆様のご支援ご協力に改めて御礼申し上げます。

続きまして今年度の開催見通しですが、コロナ感染状況は先述の通りで社会生活も徐々に回復しつつあると言え依然として抑制風潮が続いている現状に鑑み誠に残念ではありますが、本年度の総会・懇親会も開催中止とさせていただきます。

つきましては昨年同様我々役員一同会報発行、より一層の紙面充実にご尽力して参ります。会員の皆様には引き続き会報への寄稿・財政面でのご支援ご協力を賜ります様お願い申し上げます。

おわりに会員の皆様の益々のご活躍とご家族共々のご健勝をお祈り申し上げます。

世にも不思議なお話です

— 瀨在博士の長谷川先生「尋ね人」のこと —

同窓会長 赤地憲一
(高校十七回生)



東京鳩会・重見憲明会長様はじめ会員皆様には、益々ご清祥の段、心よりお慶びを申し上げます。日頃は、「コロナ」の厳しい状況下にもかかわらず、母校同窓会に對して格別なご支援を賜り、心より厚く御礼申し上げます。とりわけ、昨秋の附属中学校開校10周年記念行事につきましても、新聞広告への掲

載協賛をいただき、心より感謝を申し上げます。

さて、お話は平成17年(2005年)に遡ります。「週刊新潮」6月9日号の「掲不板」に次のような、東京鳩会の瀨在幸安博士(高一回・心臓外科学・同窓会名誉会員)による尋ね人記事が掲載されました。

「1900年は、メンデルの法則再発見の年で、遺伝子研究の先駆けとなったことは、あまりにも有名です。日本では1909年にトウモロコシによつてメンデルの法則を実証した人がいます。北信州の長野県立屋代中学・高校時代の恩師だつた長谷川五作先生です。それは先生の「著作選集」に報告されていますが、当時先生は何によつてメンデルの法則を知り、どんな風に興味を抱いたのか、論文や関係資料、報告書などが極めて少ないので、探しています。生命科学を追求する身としては、同郷の先生の詳細を知りたいのです。先生はエノキダケの瓶詰の考案者でもありました。」

その後、瀨在博士にこの記事への反響についてお伺いしたところ、「何も無かつた」とのことでした。そして、平成30年正月の高校38回「ホームカミング鳩会」で、長谷川先生のお孫様、長谷川徹氏(高38回)にお会いする機会に恵まれた。この記事のことをお伝えすると、徹氏は「実は、この頃東京におり、国電駅の売店で『新潮』を購入して、電車の中で読んでいます。普段週刊誌など買わないのです。が、どういふ訳か購入しました。しかし、自分は当時まだ、社会的に名乗り出るほどの存在ではなかつたので、沈黙していました。」とのこと。その三月、同窓会館落成式で瀨在先生の記念講演があることを徹氏にお伝えし、ここで瀨在博士とご対面が実現する運びになりました。瀨在博士の恩師を想うお気持ち

医学者として崇高な使命に敬服するとともに、普段は買わない徹氏が、たまたま祖父の記事を掲載された『新潮』誌を購入し、その中のたつた1頁の中の記事を目にされるとは、その神秘性に思いを馳せています。

終わりにあたり、母校は令和5年(2023年)に創立100周年を迎え、その記念事業や「創立100周年史」(註)の編集に向けて鋭意取り組んでおりますところをごさいます。貴会の益々のご発展と、会員皆様の健康、ご活躍を心よりお祈り申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。

【註】「屋代高校100年史」の概要を基本方針とし、約100編のエピソードやコラム記事を掲載。開校以来の980名の恩師・教職員名を在職期間と共に掲載。学芸班・運動部の創部年や最高成績等が分かる編集。県大会優勝以上の班をグラビア写真等で紹介。歴代生徒会長名、PTA会長名等を記載。

【各編の構成】第一編「旧制中学校の黎明」・第二編「新制高等学校」・第三編「進取の学校改革」・第四編「専門学科の設置」・第五編「普通科と理数科と中高一貫」と第六編「躍動する屋代健児」・第七編「普通科と理数科と中高一貫」と第八編「躍動する屋代健児」・第九編「普通科と理数科と中高一貫」と第十編「躍動する屋代健児」

て温かいご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

私は、今年度より校長を務めます馬場正一(ご)さまです。本校同窓生(高36回)です。赴任に際し、来年度創立100周年を迎える節目に母校勤務の機会を得た喜びとともに、責任の重さをひしひしと感じております。微力ではありますが校長として全力を尽くしてまいりますので、よろしくお祈り申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の影響が、当初予想していた以上に長引いておりますが、本校では、学校行事や体験的な活動を大切にしながら、できる限りの教育活動が実施できるよう教職員・生徒とともに工夫して学校生活を送っております。

今春3月には、高74回生272名を送り出しました。この学年は、高校時代の後半2年間をコロナ禍に見舞われ、制約がある中で学校生活を余儀なくされました。そして、共通テストの全国平均が大幅にダウンする中でも粘り強く受験に取組み、旧帝大17名、国立大医学部医学科6名をはじめとして、現役国立立大学進学者136名(卒業生50%)、現役での進路決定率84.2%という素晴らしい実績を残してくれました。

卒業生を送り出した後、4月6日には入学式を挙行し、高校生280名、中学生80名の新生を迎えて本年度がスタートしました。その後4月中は、コロナ感染症の影響により何回か学級閉鎖措置を取りましたが、5月以降、校内での感染状況は落ち着きを見せ、運動班・文化班が大やコンクール等に出席し、生徒たちは「文武両道」の校是のもと、日頃の練習成果を発揮して活躍する姿を見せてくれました。本年度インターハイには、ハンドボール男子・女子がアベック出場、少林寺拳法の男子個人演武で出場を果たしました。

また、東京で開催された全国高等学校総合文化祭には、将棋班・男子団体、新聞班、政経班が出場

ギター・マンドリン班は全国高等学校ギター・マンドリン音楽コンクールに出席して優秀賞及び振興会特別賞を受賞しました。

7月には、3年ぶりに保護者の皆様に公開する形で、第66回鳩祭を開催しました。生徒たち特に高校3年生は、これまで十分に経験できなかった高校での文化祭を満喫すべく、準備から本番へと本当によく頑張っていました。生徒たちの笑顔が溢れる、よい文化祭だったと思います。

学習面での活動をご紹介します。本年度は、文部科学省より指定を受けているスーパー・サイエンス・ハイスクール(S・S・H)事業が、第5期プログラム2年目にあたります。これまで20年間継続して事業指定を受けてきた実績を踏まえ、未来の科学技術イノベーションを担う創造力豊かな人材の育成を目指して、さらに取組みを進めてまいります。

また、県下初の公立中高一貫教育として立ち上げた附属中学校も、平成24年の創立以来、本年度創立10周年を迎えました。現在、附属中学校には9期生から11期生が在籍し、「自分の力を、内から外へ」を合言葉に一人ひとりが持っている力をアウトプットできるように、探究的な活動を中心とした学びの充実に取り組んでおります。

今後とも、長野県の中等教育におけるフロントランナーとして新たな挑戦への気概を忘れず、地域の学びの拠点校として誠実に努力を重ねてまいりますので、変わらぬご支援をお願い申し上げます。結びに、東京鳩会の更なるご発展をご祈念申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。

人間万事塞翁が馬
高校十五回生 羽田克己
私の屋代東高校時代は暗いものでした。がその体験が80歳になろうとしている今、独自一人を歩むことができた原点だったということがわかりました。少しそんな話にお付き合いしてください。

私は松代町に昭和18年に誕生、5人兄弟の4男として育ちました。中学3年生の時、急性腎炎にかかり自宅療養でじりじり退学して松代中学校に4年間在学し、屋代東高校に入学となりました。高校時代は絶対安静とのこと、自宅と学校を往うこと以外何もできない状態でした。唯一マンドリンクラブに入り、隅の方でべけべけと弾いたのが他人との接点だったと思います。こんな体では東京の大学にも行けず、就職もままならず、家業の経済状況も考え、国立の信州大学文学部に入学しました。思誠寮(旧制松本高校の寮で北杜夫など著名人の落書きが一杯残された豚小屋みたいな寮)に入ったのが、人生の転機でした。入寮したその日にコンペがあり、夜中にはふんどう姿で下駄ばきの先輩達が廊下をアカンシヨ節を歌いながら行進、寝ている間に「す巻き」にあつて松本駅のロビーに置いてきぼりにされたり、いままでもは全くの別世界に突入しました。ホットして昼間、マンドリンを弾いていたら、人だかりになり、俺にも教えるよと10数名が集まりました。これが今年信州大学マンドリンクラブ創立60周年になるスタートでした。

私は慢性病なんだと言う暇もなく、同好会が大きくなりそうな気運。そこで夏休みを利用して1か月の北海道無銭旅行にでることになりました。どうせ30歳までしか生きないだろうと勝手に考えていたし、このまま病気のことを黙っていて同好会仲間を迷惑させるのもマズイと思い、旅行後皆にはつきり伝え引退しようという思いでした。はじめの15日間微熱、鼻血が続き、やっと知床に着きました。ここまで来たなら松本まで何とか

私に慢性病なんだと言う暇もなく、同好会が大きくなりそうな気運。そこで夏休みを利用して1か月の北海道無銭旅行にでることになりました。どうせ30歳までしか生きないだろうと勝手に考えていたし、このまま病気のことを黙っていて同好会仲間を迷惑させるのもマズイと思い、旅行後皆にはつきり伝え引退しようという思いでした。はじめの15日間微熱、鼻血が続き、やっと知床に着きました。ここまで来たなら松本まで何とか

雑感

人間万事塞翁が馬

高校十五回生

羽田克己

特別寄稿

信州大学名誉教授
高校十七回生 中村浩志



鳥の研究50年を振り返って

私は、昭和22年埴科郡坂城町に生まれました。子供の頃の思い出は、千曲川や近くの里山で近所の子供たちと切り切り遊んだことばかりです。中学生になった頃から、考古学に興味を持つようになり、家の近くに縄文晩期の遺跡があり、土器や矢尻を拾い集めることに熱中し、厩代高校に入学してからは地歴班に所属し、3年生の時

けられた私は、同理学部動物学教室の研究生となり、生物学の授業を多数受講しながら受験に備えました。私が本格的に受験勉強したのは、この時が最初で最後でした。

3回目で大学院に合格した私は、京都でカワラヒワの研究を再開し、それから5年間カワラヒワの研究に取り組み、学位を取得しました。30歳の初めに信州大学教育学部助手として戻った私が、次の研究テーマとして選んだのが、カッコウの托卵研究でした。

しかし、カッコウの研究は、思うようにはできませんでした。恩師羽田先生の最後の仕事であるこの山に何羽のライチョウが生息するかの調査を手伝うことになったからです。カッコウとライチョウとは繁殖時期が重なるため、カッコウの調査時間が思うように取れなかったのです。

私が退官するまでの5年間に全山のライチョウ調査を終え、その後先生の研究室を引き継いだ私は、水を得た魚のように、自分自身の研究テーマであるカッコウの托卵研究に没頭してゆきました。自分で子供を育てなく、他の鳥に育てさせるカッコウの托卵は、古くから世界の研究者に注目され、多くの研究がなされてきました。しかし、カッコウは捕獲が難しく、研究の難しい鳥です。千曲川を主な調査地に、効率的なカッコウの捕獲方法を確立し、多くの個体を標識し、発信機、ビデオカメラ等の光学機器を駆使し、カッコウの行動と生態の解明に研究室の学生と取り組みました。

最先端の研究を成し遂げ、ようやく自分の過去を振り返る余裕が持てるようになった私に見えてきたのは、子供の頃の原体験の重要性でした。私がここまでやって来たのは、元をたどれば子供の頃の豊富な原体験であったことに気づきました。

カッコウの研究を終えた50歳代半ばに、また大きな転機が訪れました。ライチョウの研究を再開することにしたのです。40歳代から外国を訪れる機会が多くなり、外国のライチョウを見て、人を恐れないのは日本のライチョウだけであることに気づき、その理由には日本文化が深くかかわっていることが理解できました。日本には古くから高山には神が住むという山岳信仰があり、奥山の最も奥に棲むライチョウは神の鳥で、外国のように狩猟の対象になって来なかったからです。その後ライチョウはどうなっているだろうか？

ライチョウの研究を再開し見えてきたことは、若いころ羽田先生と一緒に調査した時には考えてもいなかった様々な課題を日本に増やすこと。多くの山の数の減少、以前には高山にいなかったニホンジカ、ニホンザル等の高山帯への侵入によるお花畑の被害、同じく高山にいなかったキツネ、テン、カラス、チョウゲンボウなどの高山帯への侵入によるライチョウの捕食、さらに温暖化によるライチョウの生息環境の縮小です。

も集団が維持できる300個体ほどに増やすこと。私にとつて鳥の研究は、生きる原動力です。おそらく体が動く限り研究を続けることになるでしょう。もうこれで日本のライチョウは大丈夫と判断できるまで、もうしばらくがんばりたいと思っています。

このままでは、日本のライチョウは絶滅することを確認した私は、ライチョウの保護にも手を付けざるを得なくなりました。それ以来、信州大学を退職した現在まで、ライチョウの調査と保護活動を20年間以上続けています。現在主に取り組んでいるのは、中央アルプスにライチョウを復活させる環境省事業で、年間100日間ほどを山で過ごしています。この事業は順調に進み、中央アルプス全体で100羽のライチョウが繁殖するまで後一歩となりました。最終目標は、人の手を借りなくて

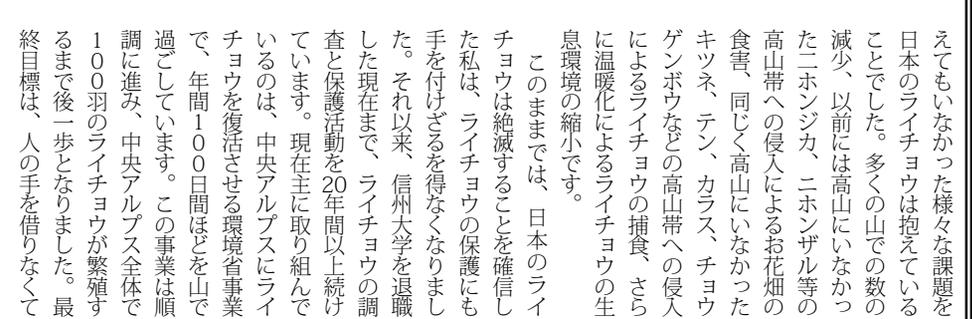
えてもいなくなった様々な課題を日本に増やすこと。多くの山の数の減少、以前には高山にいなかったニホンジカ、ニホンザル等の高山帯への侵入によるお花畑の被害、同じく高山にいなかったキツネ、テン、カラス、チョウゲンボウなどの高山帯への侵入によるライチョウの捕食、さらに温暖化によるライチョウの生息環境の縮小です。

東京鳩会役員名簿(令和4年12月現在)

Table with columns for positions (会長, 幹事, etc.) and names of members.

ゴルフ部(部長: 神津修吉(高17)、幹事: 清水 勝(高21))

4月初め、まだ白い冬羽姿のままつがいとなったライチョウの雌雄



も集団が維持できる300個体ほどに増やすこと。私にとつて鳥の研究は、生きる原動力です。おそらく体が動く限り研究を続けることになるでしょう。もうこれで日本のライチョウは大丈夫と判断できるまで、もうしばらくがんばりたいと思っています。

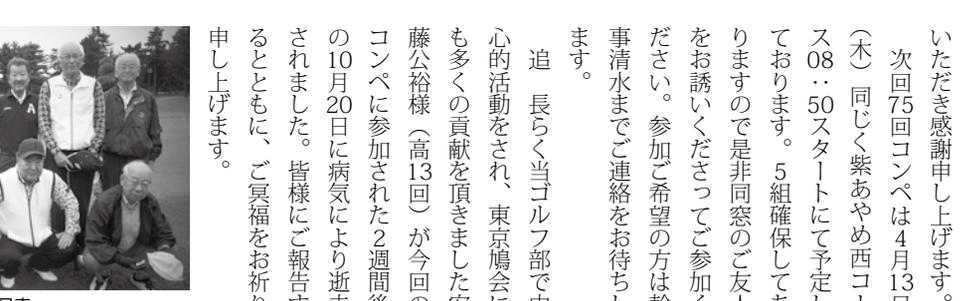
ゴルフ部 報告

令和4年度 東京鳩会ゴルフ部活動報告
今年度は雨天により春のコンペが中止になり、秋の今回こそはと手ぐすねを引いて好天を待ち望んでいましたが、前日の曇り予報を覆して朝からぐずついた天気でした。朝にはスタートするか悩みましたが、戸矢崎先輩(高1)からの「やりましょう」の一言に背中を押され、いつも通り和やかにスタートしました。

今年度も戸矢崎先輩からの寄付がありましたので12名参加者全員が賞金ないし賞品受け取ることができました。また浅野井部長よりご自身の年齢と体調問題から後進に道を譲りたいとの申し出があり、新たな部長として神津さん(高17回)が就任されました。浅野井部長には2017年より5年間にわたりお世話

東京鳩会 第39期決算報告(自令和3年4月:至令和4年3月)

Financial statement table with columns for income and expenses.



74回集合写真

編集後記
本年も会員の皆様のご協力・ご寄稿により会報三千一号の発行ができました。心より感謝申し上げます。今年故郷長野県は大きな自然災害に見舞われることなく山々を彩る紅葉、自然の恵みあふれるキノコ狩り等々心豊かな日々が訪れた様子にひとしおの喜びを覚えます。あしかけ三年に及ぶコロナ対応もワクチンや飲み薬が普及し明るい兆しが見えてきました。幹事会には必要最小限の開催となり総会準備など困難なため誠に残念ですが総会・懇親会は昨年同様見送る事となりました。最後になりましたが、厳しいご時世にも関わらず広告に伴う寄付金のご協力・ご支援、ご寄稿に改めて御礼申し上げますと共に幹事一同知恵を結集し会報発行に注力致しました事ご報告申し上げます。



新規会員の方もおられるとの吉報を聞き東京鳩会の益々の発展に期待する次第です。次年度こそ皆様と一堂に会する事ができるよう祈念致します。
東京鳩会広報 森正明